

カポエイラ

——黒人奴隷の遊戯・武技から世界遺産へ——

久保原信司（アンゴレイロス・ド・セルタン名古屋主宰・南山大学兼任講師）

はじめに：関心の所在

アフリカ人奴隷の遊戯・武技としてブラジルで創造されたカポエイラは、19世紀から20世紀初頭まで、根絶されるべき社会の病理として徹底的な弾圧を受けていた。1890年に始まる共和制では、刑法の中で明確に犯罪として規定され、長期の拘留や島流しの刑罰が科せられた。それからわずか120年足らず。2008年にはブラジルの文化省によって国を代表する無形文化財として認定されたばかりか、2014年にはユネスコによって人類の無形文化遺産にまで登録されている。かつては社会問題を引き起こす原因として扱われたものが、今日では逆にさまざまな社会問題を解決するツールとして多くの社会プロジェクトの中にカポエイラが取り入れられている。全世界160以上の国々で愛好されており、カポエイラの聖地とされるバイア州サルヴァドールには、ルーツを求めるカポエイリストたちが世界中から押し寄せている（IPHAN, 2014）。

「ブラジルの中のアフリカ」という視点から現在のカポエイラをながめてみると、表象としてはアフロ・ブラジル文化の典型としてのイメージを保持しつつも、実態としてはそのアフリカ性がどんどん薄れつつある状況がうかがわれる。今日のカポエイラは、ブラジル国民が自らの人種的ルーツに関わらず「われわれの文化」として誇りうるナショナル・シンボルであり、むしろ文化的盗用（*apropriação cultural*）と評されるほど、非黒人のヘゲモニーが優勢となっている現状が見られる。

例えばそれはブラジル中に支部を展開する巨大グループのトップが、ことごとく白人のメストリ（師範）たちで占められていることに端的に表れている。カポエイラを欧米に伝播した先駆者たちも、その多くが白人のメストリであった。それに対しバイアの長老たち（多くは黒人のメストリ）はたとえ有名ではあっても、経済的にはきわめて困難な状況を生きている。人種主義（*racismo*）は厳然と存在し、黒人を取り巻く状況は、政治的にも経済的にもカポエイラの果たした社会的上昇に見合うだけの向上を遂げていない。

本稿では、カポエイラの社会的上昇、すなわちエスニックなシンボルがナショナルなそれへと変容していく経緯を概観した上で、今日のカポエイラが直面する問題点についても触れてみたい。

1. ならず者のたしなみ

カポエイラとは、アフリカ中央部から奴隷として連行されたバンツ系（*Bantu*）の黒人たちによってブラジルで創出された、蹴り技、足払い、頭突きなどを特徴とした武技である。史料上カポエイラが初めて記録に表れるのは1789年のリオ・デ・ジャネイロの警察文書で（ASSUNÇÃO,

2005)、当時すでに取り締まりの対象とされていたことが分かる。カポエイラと称された武技は、その様式もさまざまにサンパウロ、バイーア、ペルナンブーコなどブラジルの各地に分布していたことが確認されている。しかし19世紀以前のカポエイラの実態については、これまでのところリオ以外の地域はほとんど研究が進んでいない。

18世紀後半から20世紀初頭にかけて、リオのカポエイラ（カポエイラの担い手もカポエイラと呼ぶ）たちはマウタ（malta）と呼ばれる集団を形成し、縄張り争いなどの抗争を巻き起こしていた。その担い手たちは、当初は圧倒的に奴隷の割合が高かったが、しだいにブラジルで生まれた奴隷、解放奴隷、下層のポルトガル移民などに広まっていく。カポエイラたちは、保守党、自由党それぞれの政治家たちの庇護を受けながら、彼らの用心棒になったり、選挙の不正に加担したりした。帝政期においては、警察の取り締まりは見られたものの、政治家や警察機構そのものとカポエイラとの癒着関係がその対策を困難にしていた。

カポエイラに対する本格的な抑圧が始まるのは、1889年の共和制樹立後、デオドロ・ダ・フォンセカ大統領によってサンパイオ・フェハイスが警視総監に任命されてからである。1890年の新刑法でカポエイラをすること自体が犯罪と規定され、本格的な根絶が図られる。もっとも象徴的だったのは、ポルトガル人伯爵の息子ジュカ・ヘイスの島流しだった。彼の父親は、時の外務大臣キンチーノ・ボカイウーヴァの友人で、ボカイウーヴァも自らの辞職を持ち出してジュカを釈放するよう抗議したが、フェハイスは毅然として刑を執行した。多くの上流階級の子息、知識人、外国人の中にもカポエイラが広がっていた。

2. メスチッソの理想化とカポエイラ国技化の提唱

皮肉なことに、フェハイスがカポエイラを根絶しようと徹底的な抑圧策を布いていたまさに同時期、知識人の中にはカポエイラをブラジルの国技にしようという動きが起こっていた。

当時のブラジルは、ヨーロッパの白人至上主義の理想と、黒人、混血、インジオ(先住民)が人口の多数を占める現実とのジレンマに苦しんでいた。黒人、混血は国民統合の障害とされたが、同時にブラジルのエリートには非白人が少なからず存在していたのである。そこで優生学に活路を見出したブラジルは、1870年に始まるヨーロッパ移民の大量導入で積極的に混血を推進し、劣等な人種を白人化すればよいと考える。つまり異人種間婚は、一人でも多くの国民が白人化し、優れたヨーロッパ文化を吸収する限りにおいて意味を持った。こうしてメスチッソ（混血）という概念が、ブラジルの肯定的アイデンティティとして見出された。

カポエイラとの関係で言うと、ポルトガル生まれの作家ブラシード・ジ・アブレウは、自身もカポエイラをたしなんだが、そのアフリカ起源を否定し、カポエイラはブラジルの中で創られ、発展し、完成されたと述べた。アレシャンドレ・ジョゼ・ジ・メーロ・モラエス・フィーリョは、古代ローマのレスリング、フランスのサバテ、イギリスのボクシングなどを引き合いに、カポエイラを我々の国民的格闘技とみなすべきだと主張した（REIS, 2000）。両者に共通するのは、ブラジル性のシンボルとして、カポエイラがメスチッソ文化であることが強調され、アフリカ奴隷の起源が隠蔽された点であった。

カポエイラの国技化提唱を支えたいまひとつの背景は、強兵養成の必要性を感じた軍部の、体操への関心の高まりだった。第一次世界大戦に向かう帝国主義のぶつかり合いは、さながら国家レベルでダーウィニズムが展開されているかのように見えた。ブラジルは1916年に徴兵制を導入。軍は、国民男子の従順性や身体能力開発の手段として体操に注目し、1920年にフラン

式の体操を採用した。いっぽう作家で連邦議員だったコエーリョ・ネトラ、軍人、知識人のナショナリストたちは、カポエイラを「真にブラジルのな体操、武術」として見出し、これを軍や体育教育に取り入れるべきだと主張した（SILVA, 2002）。ネトもまたカポエイラの実践者だった。

1907年に匿名の軍人がO.D.C.の名で『カポエイラ：ブラジル式体操の手引き』を著し、1928年にはアニバウ・ブルラマキが『国民体操（カポエイラージェン）：その方法とルール』を発表した。特に後者は、この時点でもっとも体系立てられた提案で、カポエイラを規則化し、スポーツ競技とする具体的なルールまで提示されている。ブルラマキは、カポエイラと路上生活者や犯罪者を関連付けるネガティブな要素を切り捨て、西洋や東洋の格闘技に匹敵するものに仕立てたいと考えた。その提案はアフロ・ブラジルの伝統を完全に捨象し、カポエイラを西洋化しようとするものだった。しかしいずれの主張も広く国民的に受容されるには至らなかった。

3. カポエイラ・ヘジオナウとカポエイラ・アンゴラ：2大流派の成立

以上に見た動きはリオ・デ・ジャネイロを舞台にしていたが、今日に至るカポエイラの方向性を決定付けたもっとも重要な改革は1930年代以降のバイーアで起こった。この時期にメストリ・ビンバを創始者とするカポエイラ・ヘジオナウ、メストリ・パスチーニャを主導者とするカポエイラ・アンゴラという2大流派が成立する。それはリオでブルラマキらが提唱した単なる格闘術とは違った、儀礼性、遊戯性を温存した上でのスポーツ化といえる改革だった。

ビンバは外国の格闘技とも対等に対戦できるよう、カポエイラに格闘技としての有効性を求め、技術的な変革を行った。1932年ヘジオナウ体育文化センター（Centro de Cultura Física Regional）の名前で道場を設立。依然としてカポエイラを犯罪とする法律が生きていたため、「カポエイラ」の語を名称に入れることは慎重に避けられた。1937年に州政府から体育教育の拠点として公認を受け、歴史上初めてのカポエイラ道場が誕生することになる。そのもっとも大きな意義は、それまで路上でのたしなみだったカポエイラが道場という場に移ったこと、さらには練習そのものを目的とするスポーツ活動としてスタートした点だった。生徒が月謝を払い、メストリがカポエイラを教えることで報酬を得るといふ、カポエイラが職業として成立する原型がここに生まれた。

ユニフォームや段級制なども導入され、近代スポーツとしての形式が少しずつ整っていく。ビンバの改革は合理主義のエートスに裏打ちされていたと指摘されるが、それはその練習法にも表れている。セクエンシアと呼ばれる、あらかじめ決められた攻防の組み合わせを反復練習することで、初心者が最も効率よく上達できるとした。さらには入門希望者には労働手帳や学生証の提示を求め、それまでの無職で怠惰なイメージを払拭し、社会的イメージの向上に努めた。

ビンバのカリスマ性とその実戦的なカポエイラ・スタイルは、道場の隣にあったバイーア医科大学の白人・中産階級の学生たちをひきつけた。なかでもシズナンド、デカーニオら初期の生徒たちは、ヘジオナウの教授法や組織作りに関しても、ビンバに少なからぬ影響を与えている。

ビンバのグループは、1936年にバイーア州知事ジュラシー・マガリャエスの官邸で、1953年にはジェトゥリオ・ヴァルガス大統領に招かれてデモンストレーションを行い、ヴァルガスをして「カポエイラこそ真の国家的スポーツだ」と言わしめた。

一方パスチーニャが主導したカポエイラ・アンゴーラは、伝統派の旗印の下、ビンバの改革に対抗する形で、カポエイラの近代化のもうひとつのオルタナティブとして登場した。ビンバの成功を快く思っていなかったメストリたちやバイーア文化の「純粋性」を擁護する知識人たちに支持された。

パスチーニャは、アフリカ性を強調し、精神的な側面、修養主義的な教育価値を付与することでカポエイラ・アンゴーラを打ち立てた。ゲーム性の復活、音楽の重要性、セルフ・コントロール、人間教育の手段、メストリや年長者への敬いなど、パスチーニャの教えは日本の武道のそれに近いものだった。アンゴーラは危険な格闘技だが、ルールを守ることが大切だと主張し、スポーツマンの紳士的態度にカポエイラの理想を重ねた。彼もまたユニフォームを採用、道場での定期的な練習を行い、路上でのホーダを好まなかった。

サルヴァドルを代表する観光地ペロウリーニョに拠点を構えたパスチーニャの道場は、伝統的なカポエイラのメストリたちのたまり場となり、観光客たちの訪問スポットのひとつにも入った。

経済的基盤を持たなかったパスチーニャを支えたのは、「純粋な」カポエイラ維持の奮闘に共感した左翼知識人たちだった。国民的作家のジョルジ・アマード、アルゼンチン人画家のカリベ、フランス人写真家のピエール・ヴェルジェ、彫刻家のマリオ・クラヴォらは、ビンバの改革を、伝統を捻じ曲げてカポエイラを白色化するものと批判し、パスチーニャを支援した。

ヴァルガス大統領は、植民地時代にまでさかのぼれるルーズ・カトリック文化に根を持ち、南部のように外国移民の文化が混じっていないバイーアの大衆文化をブラジリダージのもっとも正統な表現と考えた (ASSUNÇÃO, 2005)。バイーアがナショナル・アイデンティティーを創造できる特権的な立場にあったことは、ビンバにもパスチーニャにも有利だった。

また楽器や歌に合わせてゲームをするという儀礼的な形式が整ったのもヘジオナウ、アンゴーラに共通した改革だった。これによりバイーアのカポエイラはスポーツであると同時にアート、文化活動としても見なされるようになる。この点も音楽的要素が全く見られなかったリオのカポエイラよりも有利に立ち働いた。

晩年のビンバは、バイーアでの公的支援の少なさに失望し、弟子の誘いでゴイアニアに新天地を求めたが、大きな成功をすることなく失意の中亡くなっている (1974 年)。パスチーニャも道場を失い、養老院で孤独な最期を遂げている (1981 年)。近代カポエイラを象徴する二人の巨人の悲劇的な最期は、政府が大衆のヒーローをいかに使い捨てたかを物語ると同時に、この時点ですでにカポエイラの社会的ポジションとその黒人の担い手との乖離は明白だったことを示している。

4. フォルクローア化とスポーツ化

今日のカポエイラ形成に大きな影響力を持った2つの事象として、フォルクローア化 (folclorização) とスポーツ化 (esportivização) があげられる。

フォルクローア化の舞台の中心は観光産業だった。1960年代のサルヴァドルでは、ヴィヴァ・バイーア、ブラジル・トロピカウといった、のちに海外公演も行うことになる多くのショー・グループが結成される。そこではカポエイラ、カンドンブレ、マクレレ、サンバ・ジ・ホーダ、プシャーダ・ジ・ヘジなどの演目がひとつのパッケージになっており、なかでも上半身裸の筋骨隆々とした黒人が華麗なアクロバットを繰り広げるカポエイラはショーの花形だった。

多くのメストリたちが振り返るように、有名なショーに出演することは一つのステイタスであり、何より下層階級の若者たちにとっては魅力的な収入源となった。反面、観客の喝さいを浴びるために大げさなアクロバットや無意味な立ち回りが増えるなど、ショーでのパフォーマンスはカポエイラの技術体系に大きな変化をもたらした。民俗学者たちは「純粋な文化」が変容すると批判した。

観光ショーの需要が高まるにつれ、興行は特定の興行師の手を離れ、各カポエイラ・グループが自分たちの公演を行うようになった。結果として日々の練習の目的がショーのリハーサルにすり替わってしまう事態も見られるようになる。カポエイラの伝統の権化と見られていたパステーニャも、アカデミアの維持を観光収入に頼らざるを得なかった (FILHO, 2015)。

軍政下の 1968 年と 69 年、ブラジル空軍のスポーツ委員会はカポエイラに関する 2 つのシンポジウムをリオで開催した。そこでは流派や地域ごとにバラバラだった技の名称や競技ルールを全国統一のものにすることが目的とされた。2 回目のシンポジウムにはビンバも招聘されたが、趣旨に賛同できないとして途中退席している。

1972 年には教育省がカポエイラを公式にスポーツとして認定。ブラジル・ボクシング連盟の中にブラジル格闘技 (カポエイラージェン) 局が設置される。ボクシング連盟が最初に行ったのは全国統一基準の段級制の導入で、ブラジル国旗の色 (緑、黄色、青、白) を基調とした腰帯を採用された。

1974 年に世界で最初のカポエイラ連盟としてサンパウロ・カポエイラ連盟が誕生。翌年には最初の全国大会が開催され、競技スポーツとしての道を歩み始める。1979 年にはカポエイラという名称を国家的格闘技 (luta nacional) に変更しようという法案が連邦議会に提出されたりもした。また連盟は、加入するすべてのグループにブラジル国旗の掲揚を義務付け、練習の最初と最後に軍国色の強い「サウヴィ (salve)」という挨拶を課した (ASSUNÇÃO, 2005)。

このようなスポーツ化の流れは 20 年後の 1992 年、ブラジル・ボクシング連盟から独立し、ブラジル・オリンピック委員会の承認も得る形でブラジル・カポエイラ連盟の創設につながる。

しかしながらその後の歴史が語るように、州レベルの連盟もブラジル連盟もさほど多くのカポエイリストたちの支持を得られなかった。今日までのところカポエイラが選んだ活動単位は「グループ」であり、特定のメストリを中心とした大小さまざまなグループが分裂や合併を繰り返しながら、それぞれ独自の方針のもと活動を展開している。

5. カポエイラ・コンテンポラニアの成立と南東部での発展

1950 年代から 70 年代にかけては、バイーアを含む北東部から南東部へ、よりよい生活や仕事を求めて労働者たちの流れがあった。バイアーノたちが移住したサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロにおいて、技術的にも儀礼的にもヘジオナウとアンゴラが融合した「カポエイラ・コンテンポラニア」と呼ばれる第 3 のスタイルが生み出される。このスタイルが今日最も主流のスタイルとしてブラジル国内、海外ともに広く受容されている。ここでは最もシンボリックな存在となったグルーポ・センサーラのケースを紹介するにとどめる。

1964 年、リオの白人で中産階級のハファエウとペドロの兄弟がバイーアを訪れ、ビンバの下で数か月間練習を積んだ。リオに戻り、自分たちの邸宅のベランダでカポエイラを教え始めると、すぐに若者たちでいっぱいになった。その多くは学業も修めた、中産階級の白人だった。彼らは特定のメストリにつかず、ビンバから習ったものを土台にしながら、自分たちの中で学

びあう形を取った。定期的にメンバーがバイーアに通っては、伝統的なアンゴラのホーダに参加したり、様々なメストリに学び、その経験をリオの仲間たちに伝えるのだった。彼らは奴隷小屋を意味する「センザーラ」をグループ名とし、独自の進級制度を導入、東洋の武道を参考に反復練習を主体とした合理的なトレーニング方法を取った。ビリンバウ・ジ・オウロというカポエイラ大会で2年連続の優勝をおさめるなど、その勢いはバイーアから移住してきたメストリたちのグループさえしのぐほどだった。彼らの成功は多くのグループのモデルとなり、そのトレーニング方法や進級制度、グループ運営の仕方が模倣されはじめる（CAPOEIRA, 1992）。1974年、最高位の赤帯を取得したメンバーが独立し、センザーラは分裂する。その中からアバダ・カポエイラ、カポエイラ・ブラジルといった、今日でもブラジル最大規模を誇るグループが誕生することになる。

このように伝統の正統性は依然としてバイーアにありながら、サンパウロ、リオといった経済的に発展した都市で急速にカポエイラが広まっていくのは、カポエイラが職業として成立しえたという条件が大きい。そうした地域では生徒たちに月謝を支払う余裕があり、指導者がカポエイラで生計を立てられる環境が整いやすかった。特に下層階級の学歴のない若者たちを引き寄せたが、巨大グループの多くは白人のメストリを頂いていた。

白人・中産層への普及の結果、カポエイラ練習者が「黒く」なったのか、カポエイラが「白く」なったのか？もちろん相互に影響を及ぼしあい両方の側面があるものの、バランス的には後者のほうに傾いているといわざるを得ないのが現状だ。

6. 再アフリカ化の動きとアンゴラの復興

60年代、70年代を通じてサルヴァドールのカポエイラはヘジオナウが圧倒的な優位を保ち、アンゴラは学者たちからも「消えゆく文化」と見なされていた。そんな中カポエイラのアフリカ性を強調する動きが起こってくる。1980年代の黒人運動の再興、アフロ・ブラジル文化再評価の動きと同調して、グループ・ジ・カポエイラ・アンゴラ・ペロウリーニョ（GCAP）が中心的な役割を担った。

創立者のメストリ・モラエスは、8歳でパスチーニャのアカデミアに入門している。海軍に入隊してリオに配属されていた時代、1980年にGCAPを結成、81年のパスチーニャの死後、82年にサルヴァドールに戻って本格的な活動を開始した。GCAPの特徴は、カポエイラを黒人差別と闘う手段として位置づけた政治的姿勢にあった。高学歴で、政治的意識も高いアフリカ系ブラジル人の学生たちがグループの中核を担い、総会、部門別の委員会、外部団体のリーダーたちから構成される諮問機関を設けるなど、およそ一般のカポエイラ・グループのスケールを超えた組織構成を取っていた。人種主義を激しく告発し、他の黒人運動や地域プロジェクトと協働して、様々な啓蒙ワークショップやストリート・チルドレンに対するレッスンなどを行った。

このようなカポエイラを社会改革の手段と位置づける取り組みは、GCAPに先んじてサンパウロにも現れていた。アウミール・ダス・アレイアスを創立者の一人とするカピタウンエス・ジ・アレイアは、カポエイラをブラジル労働者階級の解放の手段と位置づけ、カポエイラの実践は社会的、政治的意識の覚醒を助長すると考えた。彼らにとってカポエイラはスポーツではなく芸術であり、それが黒人起源の文化であることを強調することは重要な意味を持った。軍政下においてカピタウンエス・ジ・アレイアの活動は「文化的抵抗」の拠点となり、多くの芸

術家や知識人をひきつけた。ソマ・セラピアの創始者で精神科医のホベルト・フレイレは、自らの開発したセラピーにアウミールのカポエイラを取り入れた。

連盟のスポーツ化を批判したいまひとつのグループは、ミゲウ・マシャードを代表とするグループ・カチヴェイロだった。とりわけ人種問題にこだわりを見せ、カポエイラの黒人起源を強く主張した。カポエイラとカンドンブレの密接なつながりを指摘し、腰帯の色にカンドンブレの神々を象徴する色を採用した。技術的にもアンゴラに傾倒し、伝統的なカポエイラを学びなおす目的で1985年にミゲウ自身がバイアに移住している (REIS, 2000)。

いずれもサンパウロ・カポエイラ連盟の方針に対抗する形で生まれてきた運動であるが、同時に統一黒人運動 (MNU) などのサンパウロの黒人運動と歩調を合わせたものでもあった。

ただしこのような動きは、カポエイラ全体の中で見ればごく一部に見られた動きであり、ブラジル中のカポエイラを特徴付けるほどの広がりは見せなかった。さらに複雑なのは、アフロ・ブラジル性を強調するアンゴラのグループが必ずしも黒人の生徒の獲得に成功しているとも言えない点である。ともあれ政治活動にせよセラピーにせよ、他の目的を達成するためにカポエイラを手段とする活動形態は、この時点から今日までさまざまな分野で展開されるようになる。

7. グローバリゼーション

アルトゥール・エミージオが1950年代から60年代にかけてアルゼンチン、メキシコ、欧米でショーの公演を行っているほか、パスチーニャが1966年にダカールで開催された第1回世界黒人芸術フェスティバルでブラジル代表団の一員としてカポエイラ・アンゴラを披露したのが先駆けだった。

いわゆるスポーツ活動としてカポエイラが広まり始めるのはヨーロッパ、米国ともに70年代以降である。よりよい生活を求めての労働移民とショー公演のメンバーが現地に残留するというのが2つの代表的なチャンネルだった。今日では東欧、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど、世界160カ国以上に広まっているといわれる。

カポエイラが、本来の文脈を離れて世界中で受容されることは、それぞれのホスト文化との交わりを通じて新たな意味づけをされることを免れない。本稿のテーマとのかかわりで言えば、例えば奴隷制やその残滓たるブラジルの人種主義といったテーマにどの程度カポエイリスタたちの意識が向くかという問題がある。米国のアフリカ系アメリカ人の中には、カポエイラの真の意味を理解できるのは黒人だけだと主張したり、黒人の生徒しか受け入れない指導者が現れるなど、奴隷制の経験を経験した特別な反応も見られた。ただ世界全体で見た場合、カポエイラのレッスンの場は、人種、階級、エスニシティ、ジェンダーを超えた共存の場となっており、他者の尊重、異文化への寛容など市民性を育てる教育スペースとして機能している。

そもそも競技スポーツとして確立されておらず、明確な勝敗をつけることもないゲームの性質上、カポエイラを取り巻く活動は協調、協同の性格を帯びやすい。そこに「奴隷たちの自由の渴望」とパスチーニャが言った、権力に対する抵抗というシンボリックなイメージが重なり、スポーツの枠を超えたライフスタイルとして、資本主義の競争社会に疲れた人々を魅了する。ただしそこには当事者の気負いはなく、エキゾチックでカジュアルな「抵抗のアート」として消費されているのが一般的だ。

おわりに

ブルラマキからビンバ、パステーニャにいたる改革は、近代スポーツの発生過程、とくに 19 世紀後半にヨーロッパやアジアで起こった格闘技の組織化のプロセスと平行的な動きとして見ることができる。それまでの「怠惰」「犯罪」といったイメージが浄化され、幅広い社会層にカポエイラが受容されていく。

国民統合のナショナル・シンボルを模索していたヴァルガスの新国家体制（エスタド・ノヴォ）にお墨付きを与えられたバイアのカポエイラがブラジル全土へ普及していく。それを下支えしたのはジルベルト・フレイレの人種デモクラシーだった。白人至上主義における人種的劣等感を、混血文化を積極的に肯定することで克服しようとする思想に、カポエイラのみならず、サンバ、カンドンプレ、フェイジョアードといったアフロ・ブラジル文化が見出された。この時点からこれらのシンボルは黒人の専有物ではなく、ブラジリダージを体現する国民文化として扱われていく。

ただしそれらは観光の局面に代表されるように、消費者向けの商品としてステレオタイプ化された形式で受容され、本来の歴史や多様性、当事者にとってのアイデンティティ的価値が尊重されたものではなかった。サンバもカポエイラも文化的に収奪されたうえでナショナル・アイデンティティとして利用されたのであり、その担い手の政治的、経済的状況は不問にされた。今日ブラジルで最も「黒い」町サルヴァドールにおいて、黒人によって創出されたアシエ・ミュージックのトップ・アーティストがことごとく白人に占められ、反面、路上では黒人が物乞いをしているという現実も同根である。

以下は、カポエイラは黒人のアイデンティティ確立に「必要」だと考える、ナヴィオ・ネグレイロ・カポエイラ・アンゴラ協会（ACANNE）のメストリ・ヘネの言葉である。

「外国人にとってカポエイラは嗜好品。ブラジル人がフランスのワインを飲んだり、スペインのパエリアを食べるのと同じ贅沢なことだ。しかし我々にとっては必需品。メルカード・モデロやペロウリーニョの歴史的意味を理解するためにも、我々はカポエイラをする必要がある。……ホーダの中で外国人は歌を歌いたがらない傾向がある。それは外国人とカポエイラはお金でつながっているからだ。我々とカポエイラは心情でつながっている。歌を歌うことは祖先を敬い、カポエイラを作った奴隷たちに感謝することであり、歌を歌うことがホーダの「参加料を払う」ことだ。……でなければ自分は君たちの雇われ人になってしまう。私はお金のために教えているわけではない。これは愛情に基づいた交換だ。」（DURIN, 2008）

このように今日でもアンゴラのグループの中には、黒人の自尊感情と社会的地位向上のためにカポエイラに取り組んでいるグループもある反面、グローバルな文脈では特定の階級やエスニック・グループと結びつくことなく、管理社会への抵抗、自由の希求、多様性の尊重といった、より普遍的で包括的な価値を体現したサブカルチャーとして共感を得ている（ASSUNÇÃO, 2005）。非黒人のカポエイリスタにとっては、いったんその普遍的な回路を通して、あらためてブラジル黒人を取り巻く人種問題というスタート地点に戻ってくるといえるだろう。

しばしば「カポエイラは一つの種族だ（Capoeira é uma raça）」と言われるほど、特に若い世代の間では、人種や民族を超えた、トランスナショナルともいえる連帯が見られる。カポエイラをしているというだけで、世界中の人々と既知の親友のように打ち解けられるし、「ホーダの

中では誰もが平等」というのが、多くのカポエイリスタが認めるカポエイラ的美徳である。だとすれば今後の課題は、ホーダの外の不平等、カポエイラの本来の敵である人種主義にどう立ち向かえるかに、人類の遺産となったカポエイラの真価が問われるであろう。

【参考文献】

- ASSUNÇÃO, Matthias Rohrig. 2005. *Capoeira: the history of an afro-brazilian martial art*. London: Routledge.
- CAPOEIRA, Nestor. 1992. *Capoeira, os fundamentos da malícia*. Rio de Janeiro: Record.
- DURIN, Selma; REDOLFI, Annick. 2008. *Eu não nasci para jogar capoeira, fui enviado*. Paris: Je Veux Voir Production, DVD.
- FILHO, Paulo Andrade Magalhães. 2015. “Arte ou luta? As gingas da capoeira entre o folclore e o esporte”, In: SIMPLÍCIO, Fanciane; POCHAT, Alex.(org.). *Pensando a capoeira: dimensões e perspectivas*, Salvador: MC&G.
- Instituto do Patrimônio Histórico e Artístico Nacional. 2014. *Roda de Capoeira e Ofício dos Mestres de Capoeira*. Dossiê Iphan 12. Brasília: Iphan.
- REIS, Letícia Vidor de Souza. 2000. *O mundo de pernas para o ar: a capoeira no Brasil*. São Paulo: Publisher Brasil.
- SILVA, Paula Cristina da Costa. 2002. *A Educação Física na roda de Capoeira: entre a tradição e a globalização*. Dissertação (Mestrado em Educação Física), Faculdade de Educação Física, Universidade Estadual de Campinas.

本稿は「久保原信司『カポエイラの地位上昇過程について：黒人奴隷のシンボルから国家的スポーツへ』、名古屋大学国際開発研究科修士論文、1997年」をベースに、その後の知見を交えて大幅に加筆、再構成するかたちでまとめた。

